日刊 建設工業新聞

## 人生100年社会デザイン財団
# 城西大学 学長 藤野 陽三氏が講演
## 持続可能なネットワーク形成へ
### あすからオンラインフォーラム配信 インフラ分野で活動本格化

幅広い分野で新たな人間像と組織像を模索し、今後の社会の在り方を研究する「人生100年社会デザイン財団」は、社会インフラ分野での活動を本格化させる。昨年10月の発足後、社会インフラをテーマとした初のオンラインフォーラムを、18日から4月8日まで配信予定。同財団顧問の藤野陽三城西大学学長が講演し、橋梁の維持管理分野などを中心とした自身の研究活動を振り返りながら、今後のインフラ整備・管理の在り方について持論を展開する。

今回のフォーラムのテーマは「人生100年社会のデザインと社会インフラを考える」。藤野氏のほか、同財団代表理事の牧野鷗東大大学院教授が講演。両氏と岐阜大学名誉教授の六郷恵哲氏を交えた座談会の様子も配信される。視聴方法などフォーラムの詳細を財団ホームページ（http://www.100design.or.jp/）で紹介している。

「異分野連携によるイノベーションがより重要になる」と説く藤野氏

藤野氏は事前収録した講演で「この半世紀は建設の時代だったが、これからは守る時代だ」と強調。専門の橋梁分野で長大橋建設など新設事業が活況だった時代に、将来を見据えて「振動制御・モニタリング（状態監視）」に着目した経緯などを説明した。

さまざまな識者らのインフラに対する概念を交えながら、求められる機能や価値について言及。新規建設の時代を経て大量のストックを持つ現代では、有事や非常時への対応に比べて平時のメンテナンスが後回しになりがちな状況を踏まえ、社会インフラをバランス良くマネジメントする必要性を訴えた。

内部の劣化など、目に見えないところに災害リスクを抱えるインフラの予防保全の難しさを指摘した上で、情報・通信やロボティクスなど異分野と連携しながら技術を持ち寄り、新たなシステムを生み出すイノベーションを重視。「周囲から（技術や知見など）吸収して社会に実装していくことが土木工学の中心にある」とし、異なる分野を横串で差す役割を担うエンジニアの確保・育成も課題の一つに挙げた。

人とのつながり（ネットワーク）が自身の成長につながるように、社会インフラの効率的な維持管理でも「持続可能なネットワークを形成し保ち続けることがより大切になる」と述べた。

同財団では大学や行政、関係機関、企業らと連携して人生100年社会のグランドデザインを描き、研究成果の社会実装を目指す。社会インフラをはじめ、空間や産業、食糧・生態系、健康・生きがいなど、各分野を「デザインリンク」と称した研究領域に細分化。それぞれが抱える課題解決に向けた研究を、相互に融合させながら活動を展開する。

主な活動は「学習基盤事業」（社会デザイン概論・各論の講義、招待研究者による特別講義、研究発表や交流の場となるシンポジウム・セミナー開催など）、「共同研究事業」（領域別研究会による社会実装に向けたFS〈実現可能性調査〉、同様の領域・分野で活動している外部組織との連携など）、「実装支援事業」（今後の社会を支える人材育成とその資格認定、コンサルティングなど）。財団の代表理事は牧野氏のほか、日本社会事業大学の神野直彦学長が務めている。

2021.3.17